

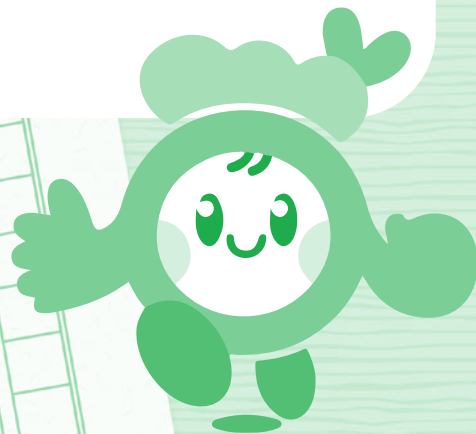
令和7年度

第43回

福祉体験

作文コンクール

優秀作品集



©aichikenshakyo

はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて百八十六校、三百二十四名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。日常生活の中での様々な経験や家族などとの身近な体験、ボランティアや福祉実践教室などを通して気付いたこと、感じたことが素直な気持ちで作文に表されておりました。この作文コンクールにご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十八編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高等学校、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

令和八年二月

社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会

はじめに・・ 1
 目次・・ 2

小学校低学年の部

わたしのかみのけつかってね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 春井市立鳥居松小学校 一年 佐方 結衣子 4
 びょう気の人も自分らしくすごせるように 扶桑町立柏森小学校 二年 藤岡 希羽奈 5
 だれかの笑顔のために・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 半田市立乙川東小学校 三年 竹内 桃 菜 6
 だんさとわたし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 西尾市立米津小学校 三年 柴山 桃 佳 7
 思いやりの気持ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田原市立中山小学校 三年 小田島 朱 杏 8
 ちいき子ども食堂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 北名古屋市立師勝北小学校 三年 野澤 小 町 9

小学校高学年の部

個性を大切にしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 豊川市立小坂井東小学校 四年 立松 滯 10
 わたしのお兄ちゃん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 岡崎市立小豆坂小学校 五年 奥田 紗 和 11
 認知症キッズサポーター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 一宮市立丹陽小学校 五年 吉田 旭 牙 12
 何気ない一歩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 愛西市立佐屋西小学校 五年 長谷川 雄 大 13
 祖母と認知症・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 清須市立清洲小学校 五年 澤村 美 咲 14
 車いすで広がる思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 北名古屋市立五条小学校 五年 中島 凛 15
 ごみひろいから始まる助け合い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 大治町立大治南小学校 五年 飯田 有希乃 17
 みんなが気持ちよく生活できるように・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 知立市立八ツ田小学校 六年 野畑 ななみ 18
 みんなちがって、みんないい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 知立市立来迎寺小学校 六年 浦田 風 19



私と妹……………	清須市立西枇杷島小学校	六年	加藤	由依菜	21
マタニティマークのたいせつさ……………	弥富市立十四山西部小学校	六年	加藤	莉緒奈	22
「ふつう」って何だろう……………	幸田町立深溝小学校	六年	太田	穂香	23

中学生の部

歌でつながる心……………	瀬戸市立幡山中学校	一年	村尾	華穂	25
大事な「とよちゃん」……………	南知多町立南知多中学校	一年	濱口	凜	26
弟の笑顔が教えてくれたこと……………	一宮市立西成東部中学校	二年	大野	未愛	28
寄り添う心と支える技術に導かれて……………	瀬戸市立水野中学校	三年	谷口	雄詠	29
相手の気持ち……………	春日井市立柏原中学校	三年	山田	若奈	31
支えること、寄り添うこと……………	高浜市立高浜中学校	三年	杉浦	杏	32
祖父の言葉……………	清須市立春日中学校	三年	小島	涼伍	34
みんなで食べるとおいしいね……………	知多市立旭南中学校	三年	石井	心陽	35

高校生の部

その人らしい生活を支える……………	愛知県立宝陵高等学校	一年	長野	歩美	37
福祉体験から得た気づき……………	愛知県立知立高等学校	二年	野村	そら	38

審査経過……………					40
-----------	--	--	--	--	----

作文コンクール要項……………					41
----------------	--	--	--	--	----

わたしのかみのけつつかってね

春日井市立鳥居松小学校 一年

佐方 結衣子

わたしのながいかみのけは、おしりまでのびていました。まえがみだけきつてずつとのばしていたかみのけを、なつやすみにはじめてきりました。どうしてかというと、ヘアドネーションをするためです。おかあさんもかみのけがなくてわたしもまねをしてのばしていました。おかあさんはヘアドネーションをするためにのばしているときいてわたしもやってみることにしました。

ヘアドネーションをするために、おかあさんとほんを2さつよみました。ヘアドネーションのウィッグをつかうのは、がんをなおすためのくすりでかみのけがなくなるだけじゃなくて、けがぬけてしまえばようきやじこなどでかみのけがなくなることがあるとしりました。わたしは、かみのけをのばしつつけて、たいへんだったことがたくさんありました。ようちえんやがっこうのひはかならずかみのけをしぼりました。きゅうしょくとうばんのときにぼうしにかみのけをぜんぶいれるのがなかなかうまくできませんでした。トイレにいったらしぼったかみのけをまえにしたり、いえでかみのけをしぼっていいときは、よごれないようにてでかみのけをにぎってトイレをしていました。ほんには、びょうきとたたかうこともや、おかあさんがびょうきでなくなったこと、ものさくぶんがのつていました。いままでかみのけがなくてやりにく

いこともたくさんあったけど、びょうきのひとにくらべたらわたしがやったことはたいへんじゃないとおもいました。

はじめてのびょういんをずつとまえからたのしみにしていました。びょうしさんがかみのけをむすんで、さいしょにおかあさんがわたしのかみのけをきりました。わたしはかみでみながらうれしくなりました。むすんだところをぜんぶきったら、きれいにしあげしてもらいました。さいごにかみのけをくるんとしてもらってうれしかったです。わくわくしていたらあつというまにおわりました。おにいちゃんに「ぼくはきらないでほしかった。でもかわいくなつたね。」といわれました。

かみのけをもつてかえってゆうびんでおくるじゅんびをしました。おくるまえにかみのけをぴんとのばしたらいちばんながいところで35センチありました。おかあさんは48センチありました。はやくウィッグになつてつかうひとがえがおになりますようにとおもいながらポストにいれました。

かみのけがみじかくなってごはんがたべやすくなりました。でもたべおわったらかみのけにごはんつぶがついていたのできをつけました。トイレはらくになりました。わたしはびょうきでかみのけがなくなるひとがいなくなつて、ヘアドネーションがいらなくなるといいなとおもいます。またのばしていきます。





びょう気の人でも自分らしくすごせるように

扶桑町立柏森小学校二年

藤岡 希羽奈

わたしは、びょう気や体のふゆゆうがある人も、たのしくすごせる社会になるといいなと思っています。

わたしのおじいちゃんは、はいのびょう気で、さんそをすいながら生活をしていました。あるくのもゆつくりで、すぐにつかれてしまうので、わたしはおじいちゃんのあるくペースにあわせてあるきました。

そうすると、おじいちゃんが、「ありがとう。のほちゃんはやさしいね。」

とわらっていつてくれました。そのときわたしは、とてもうれしかったです。

びょう気があっても、まわりの人たちが少し気をつけるだけで、一しよにたのしくすごすことができます。わたしは、そのことをおじいちゃんとすごす時間から学びました。

また、お店で車いすの人をたすけている人を見ました。その人は車いすの人がエレベーターにのるのをボタンをおしてまわって、「ゆつくりでいいですよ。」

と声をかけていました。わたしは、とてもすてきなと思いました。わたしも、そんなふうになんかやさしく声をかけられる人になりたいと思いました。そして、こまわってほしいと思ったら、

「お手つだいしましょうか。」と声をかけたいです。

学どうでは、耳の聞こえにくい人のために「手話」を教えてもらいました。さいしょは、手の形やうごかし方がむずかしいと思いましたが、「ありがとう」や「こんにちは」や「おはよう」などの手のうごきで自分の気もちがつかえられたとき、とてもうれしかったです。もっと手話をおぼえて、耳の聞こえにくい人に出会ったら、手話で会話をしてみたいです。

ボランテイアは、とくべつなことでもよいと思います。ドアをあけてあげたり、ゆつくりあるいてあげたり、手話であいさつしたりすることも、心のこもったボランテイアだと思います。わたしは、びょう気の人でも元気な人も、みんなが自分らしくすごせるように、やさしい気もちをもつて行どうしたいです。これからも、ふくしやボランテイアのことをもっと知って、自分にできることをふやしていきたいです。そして、まわりの人とたすけ合って、だれもがえがおでいられる社会をつつていきたいです。



だれかの笑顔のために

半田市立乙川東小学校三年

竹内 桃菜

わたしはボランティアでご当地ヒーローのショーに出演しています。昨年はその団体が、ふくしの心を広めるために半田市内のように園や保育園を回り、小さな子にもわかりやすいふくしのショーをしました。わたしの出身のようち園の日は、ラーケーションを取りわたしもショーに参加して来ました。

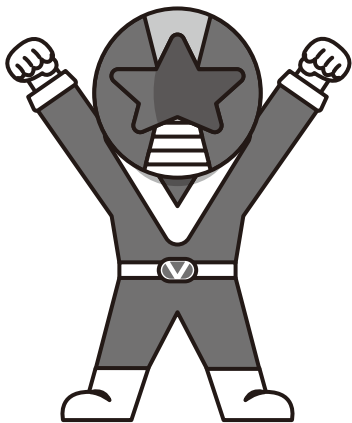
その中で、三つのふくしがありました。まずは電車でお年寄りが席をさがしている場面。ヒーローはすわっています。席を代わってあげようとするけど、勇気が出なくて声をかけられません。こんな時わたしだったら、がんばって話しかけて席をゆずってあげたいです。もしことわられたら、悲しくなってしまいます。でもそれを考えてやめてしまえば、本当に困っている人を助けられなくなってしまいます。みんなが小さな勇気を持つことが、ふくしにつながっていくのだと思います。

次の場面はにんぶさんがたくさん荷物を持って大変そうにしています。そこへヒーローが通りかかり勇気を出して荷物を持つのを手伝ってあげます。なのに、にんぶさんというのはうそでした。ヒーローはお手伝いがいらないとわかって悲しそうです。わたしが思うに、うそだとしても悲しまなくていいんです。なぜかという、最初はできなかったのに、今回は行動できた事がすごいからです。勇気を出してやってみて、失敗しても成功です。まずやってみようという思いがあれば、だれかが困っていたら行動できるからです。まずは自分が人のためにやってみて、う

まく助ける事ができなかったら、他にだれか助けてあげられる人を呼びに行くとかちがう方法を考える事もできると思っています。

最後は、家庭の話でした。お母さんが家でそうじゃせんたくをしたりごはんを作ったりいそがしくしているのに、お父さんも子どももゴロゴロして何にもしません。わたしだったら、自分でお手伝いできる事をやります。ふくしとは、ふだんのくらしをしあわせにということなので、家でできる事だつてあります。ふくしという言葉を聞くと、むずかしい事を考えてしまう人が多いと思います。いつも電車やバスに乗らないし、知らない人に席をゆずるチャンスはなかなかありません。でも、今すぐにできるふくしもあるんです。おうちの人のお手伝いをするとか、学校の友だちが忘れ物をして困っていたら、かしてあげるとかです。わたしは、まず今自分にできる事をしようと決めました。

自分以外の人のために、何か一つでも役に立つ事をする事で、誰かの笑顔を見られるようになります。すると、自分もうれしくなって、笑顔になります。自分の行動で人を笑顔にすること、それが本当のヒーローです。ショーに出演しなくても、誰もがヒーローになれます。みんながヒーローになって、ふくしの輪を広げましょう。





だんさとわたし

西尾市立米津小学校三年

柴山 桃佳

わたしは生まれつきの病気で車いすに乗っています。

車いすで生活していると、いろいろなだんさに出会います。

たとえば、通学路です。わたしの本当の通学路には階段があるので、階段のない遠回りの道を歩きます。早く学校に行きたいから遠回りはいやです。

学校に着くと正門のレールのでこぼこがあります。

それから階段を上るときは階段んしょうこうきに乗ります。階段んしょうこうきはガタガタするからこわいです。

このように、わたしが学校の教室に着くまでには、さまざまなだんさを乗りこえなければなりません。

お出かけをするときもだんさに出会います。

きよ年、ぎふのおばあちゃんの家に行ったとき、電車とホームの間に大きなすき間があるので、駅員さんがスロープをつけてくれました。乗りかえが二回あったけれど、全部駅員さんがスロープをつけてくれました。自分のために駅員さんが待っていてくれて、うれしかったです。

ぎふのおばあちゃんと毎年はつもうでに行っている神社は、階段を上らないとおまいりができません。だから、お父さんがわたしをだっこして、お母さんが車いすを持っていってくれました。スロープがあったほうが上に楽に行けそうなので、スロープがあつてほしいです。

いつもわたしの車いすをおしてくるお母さんは目の前にだんさがあ

ると、「うあ。」と思うそうです。

わたしは目の前にだんさがあつても、お母さんやお父さんや大人たちがいるのであまり気になりませんが、大人たちがいなかったら、「うっ、だれかの助けがひつようだ。」と思うと思います。

このように、わたしにとってだんさは、てきです。小さいだんさだったら一人でも乗りこえられるけれど、大きいだんさだと大人がいなくてきをたおすことはできません。

わたしにとってのてきがこれから少なくなりますように。



思いやりの気持ち

田原市立中山小学校三年

小田島

朱杏

わたしのお母さんは、かいごしせつではたらいています。わたしが生まれる前から、ずっとこの仕事をしています。休日には、わたしもお母さんのしよく場へついていって、たくじ所ですごしています。お母さんは、わたしが小さいころには、おざい所のひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんの所にも、よく遊びにつれていってくれました。

「ママは、どうしておじいちゃんとおばあちゃんがすきなのと、お母さんに聞くと、

「おじいちゃんとおばあちゃんは、いつもみんなにやさしくしてくれるでしょ。それに物を大切にすると、何でもこつこつがんばるがんだり屋さんだから、おうえんしたい気持ちになるんだよ。」

と教えてくれました。お母さんは、はたらいているとき、いつもにこにこして楽しんでそうです。わたしも、たくじ所にいる子たちといっしょに、しせつのおじいちゃん、おばあちゃんのために歌やおどりをひろったり、よるこんでもらえることを自分たちで考えてゲームを行ったりしたことがあります。自分たちがすきな歌やおどりではなく、おじいちゃん、おばあちゃんが分かるようなどうややおどりをえらんだり、みんながかんたんにできるゲームを考えたりします。みんなで一生けん命考えて、おじいちゃんとおばあちゃんの前でひろうしたとき、

「ありがとうね。またやってね。」

と、えがおで言ってくれて、とてもうれしかったことを思い出しました。



今までは、手足がうまく動かないからかわいそう、目や耳がわるくてかわいそうなどと思っていた気持ちから、何か助けてあげたい、よるこんでもらいたいという気持ちになりました。わたしが小さいころから、お母さんはよく、

「こまった人がいたら助けてあげてね。だれにでもやさしくしてね。」と言っていました。この意味が分かった気がしました。

これからも自分のことだけでなく、助け合いの気持ちをわすれないように生活していきたいです。



ちいき子ども食堂

北名古屋市立師勝北小学校 三年

野澤 小町

ちいき子ども食堂では、みんなでいっしょに楽しくごはんを食べたり、お手伝いをしたりしています。さいしよにかんぱんを作って「ここの子ども食堂をやっているよ」と来る人にわかりやすくしたり、うけつけをしたりします。ごはんができたなら、もりつけをしたり、ならべたりして、みんなでじゅんびをがんばります。食べ終わったなら、おさらをあらって、かたづけもいっしょにします。

ちいき子ども食堂がはじまると、たくさんの方が集まってきました。さいしよは知らない人ばかりだけど、何回も来るうちにあいさつができるようになったり、おしゃべりしたりして、だんだん友だちがふえていきます。近くに住んでいるのに、はじめて会う人もいて、こんな人もいるんだなと思うこともあります。おとなの人とも話せるようになって、知っている人がどんどんふえてうれしです。

さいきは、ごはんのねだんが高くなっていて、家で食べて食費もたいへんという話を聞きます。ちいき子ども食堂では、やすくておいしいごはんが食べられるので、とても人気があります。そして、一人で食べるより、だれかといっしょに食べる方がずっと楽しいです。「おいしいね」とか「これすき」とかいろいろなお話をしながら食べられるのが、すごく楽しいです。

ちいき子ども食堂には、えがおがいっぱいで、わらい声も聞こえます。ごはんだけ食べるのではなくて、あそんだり、おしゃべりをしたりして、

みんな楽しくすごせる場所です。子どももおとなも、だれでも来るたびにやさしい気持ちになれる食堂は、わたしの大好きな場所です。

この前は、ちいき子ども食堂のなかまといっしょに、おまつりのイベントにもさんかしました。わたしは、コイン落としゲームのけいひんをわたすかかりをしたり、アイスキャンディーを売ったり、たませんを作ったりしました。さいしよは、ちよっときんちようしたけれど、

「ありがとう。」

と言ってもらえてうれしかったです。

おまつりは、たくさんの方が来て、楽しいという声やおいしいという声が聞こえて、ちいき子ども食堂のみんなで力を合わせてお手つだいをしたり、まつりに来る人も楽しんでくれたり、人がふえると楽しいです。子ども食堂もおまつりもずっとさんかしたいです。





わたしのお兄ちゃん

岡崎市立小豆坂小学校五年

奥田 紗和

わたしは、ずっと不思議に思っていることがあります。それはわたしのお兄ちゃんのことです。お兄ちゃんはお話ができない病気で、他の子とは、だいぶちがいます。わたしが小さいころ、「なんでお兄ちゃん、お話できないの。」と親に聞きました。そのときに、

「お兄ちゃんはお話できない病気なんだ。」

と、教えてもらい、病気なんだと思っていました。

五年生になって、ある日、「お話できない病気」がどういいう病気か気になりました。ふつうの病気は、「コロナ」や「インフルエンザ」と、名前がついていて、いつか治るのに、お兄ちゃんの病気の名前は知らないし、ずっと治らないのはなぜだろうと思ひ、わたしはまた親に聞いて「自閉しよう」だと、知りました。自閉しようは、生まれつきで、完全に治らない病気だと知ってかわいそうだなと、思いました。

もう一つわたしは、お兄ちゃんの通う学校が、みんなとちがう学校なので気になりました。お兄ちゃんが通う学校は、みんなとちがう学校で、障がいのある子どもたちが通う特別支援学校という学校です。そこでの授業は、同じ絵のカードを選ぶことをしたり、生活が自分で出来るようになるための練習をしたりしています。わたしは、お兄ちゃんの他にも多くの子たちが自閉症や別の障がいがあることを知り、お兄ちゃんと同じだと気付きました。

朝、起きるとお兄ちゃんの機げんが悪くてさけんだりはしゃいだりし

ていて、わたしは「うるさいな。」と思ひながら過ごしていました。外に出て遊んでいると友達から、

「お兄ちゃんの声うるさくないの。」

と、聞かれたので、少し間を開けて「まあね。」と言いました。さつきまで「うるさいな。」と思っていたのに友達から言われてから、なぜかむつとしました。家に帰って私は心の中でもやもやしていました。友達に言われたことがいやだったのと、自分がお母さんに言われたことを忘れていたからです。

「お兄ちゃんは、病気でしゃべれなくて伝えられないから苦しくて、さけんだり大きい声が出たりするんだよ。」と聞いていたのに、朝のわたしはお兄ちゃんに「うるさいな。」と言ってしまったのもうしわけないと思ひました。

最近、お兄ちゃんはだんだんできることが増えてきました。でも、ふつうのことができるようになるまですぐ時間がかかるので、わたしは小さいころお兄ちゃんといっしょに遊ばなくて、「兄妹なのに一人っ子みたい。」と、思っていました。ある日、お兄ちゃんができなかったことができるようになったとき、家族みんなで「よかったね。」や「すごいじゃん。」とほめて喜びました。わたしはこの瞬間がとても好きです。お兄ちゃんもうれしそうだし、みんな笑っています。わたしもお兄ちゃんといっしょにできることが増えて楽しいです。

わたしは不思議に思っていたお兄ちゃんのことをだんだん分かってきました。それに、

「お兄ちゃんがこまっているときに助けてあげよう。」と、思えるようになりました。でも、まだまだお兄ちゃんの知らないことがたくさんあるし、助けてあげられないこともまだあるから、お兄ちゃんのことをもっと知って助けてあげたいと思います。あと一つ、わたしは、お兄ちゃんのおかげでお兄ちゃん以外にもこまっている人がたくさんいることが分かりました。病気でどうにもできないことで悲しいけれど、お兄ちゃん

もがんばって生活しているし、わたしにいろんなことを気付かせてくれました。そんなわたしのお兄ちゃんはみんなとちがうけれど、わたしはお兄ちゃんのが大好きです。



認知症キッズサポーター

一宮市立丹陽小学校五年

吉田 旭 呀

「認知症サポーター養成講座」に参加してぼくは、「認知症キッズサポーター」になりました。「認知症キッズサポーター」とは、認知症について正しく理解し、認知症の人やその家族を温かく見守り、声かけやちょっとした手助けができる小学生のことです。

認知症は、さまざまな原因で脳の細ぼうが死んでしまったり、働きが悪くなったりするためにおこる脳の病気によるものです。ものわすれがひどくなったり、できていたことができなくなり、今までのような生活がおくれくなります。

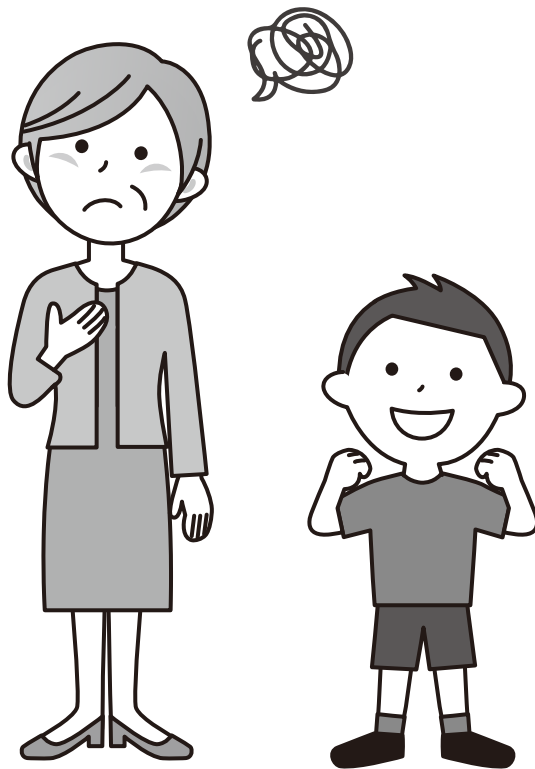
認知症の人への接し方として、「おどろかせない・いそがせない・相手がいやだと思うことを言わない。」認知症の人は、「後ろから急に話しかけられると、だれだかわからなくてびっくりします。正面からゆっくりと話しかけてあげる。」元気がなくなったり、とっせんおこりだしても、やさしいことばをかけてあげる。うまくしゃべれないだけで、「もしかしたら何か言いたいことがあるかも」と相手の気持ちを考え、日ごろからのあいさつが大切。認知症とは、どんな病気なのかと、色々と学びました。

今のぼくは、周りの人に言われてから動いていることが多く、こまっている人がいても気付かず、すぐに助ける事ができていません。

認知症になると、つらいこともあるけれど、家族や友だちがいるとつらい事も乗りこえる事ができると、認知症の方から教えてもらいました。



多くの家族にも、認知症の人がいます。認知症の人への接し方についてちゃんとできているか分かりません。ぼくができない事もたくさんあります。でも認知症の人を直接助ける事だけでなくサポートをしている家族やまわりの人を助ける事も「認知症キッズサポーター」の役目だと学び、これからは、周りを見て、「何をしようとしているか？助けが必要か？」をぼくなりにも考え、家族や身近な人を見守り、こまっている人に勇気を出して声をかけて助けてあげたいです。それが「認知症キッズサポーター」としての、ぼくの役目だと思います。



何気ない一歩

愛西市立佐屋西小学校五年

長谷川 雄大

「おう、雄大。元気にしとったか？」

久しぶりに、祖父母の家に行くと、近所に住んでいるおじさんが先に、僕に笑顔で声をかけてくれた。僕は久しぶりだったので、少しはずかしくて、照れ笑いで返した。おじさんとは祖母の弟である。そのおじさんや、祖母のきょうだいは、皆、近所に住み、まるで友達のように仲良く暮らしている。畑でとれた野菜を分け合ったり、作ったおかずを届け合ったり、時にはお互いの家の居間に集まってお茶を飲みながら、和気あいあいと会話している。周りから見ても、ほっとする関係性だ。

いつも僕の心を温かくしてくれるおじさんたちも、よく考えてみると、社会では、「高齢者」として扱われる年齢になっている。おじさんたちの会話からも、

「最近はずっと昔みたいに身体が動かなくなった」

「ひざやかたの痛みがとれない」

などの言葉が聞こえてくるようになった。

「大丈夫かな？」と心の中で心配する気持ちがあるものの、実際に助けなければならぬ状況を経験していない僕にとっては、何をどうすればよいのか分からないのが本音だ。

「福祉って何だろう？」

そぼくにそう思った僕は、家にある国語辞典を引いてみた。するとそこには、「人々が安心して暮らせる環境」という意味が書かれていた。

言葉の意味を知って、僕はほっとした。「福祉」という言葉を聞いて、まず僕の頭の中で連想されるのは、「介護」や「介助」という言葉だ。病人やお年寄り、体の不自由な人のお世話や手助けをすることも、もちろん福祉につながるが、言葉をもっと広く考えると、「人々の安心につながる行動そのものが、福祉なんだ」と、僕の中で福祉がぐっと身近なものに感じられた。

この、「安心」という言葉を意識すると、日頃の生活のさまざまなものが見えてきた。おじさんたちがきょうだいと関わり合い、助け合って生活していること、僕がおじさんたちの輪の中に入り会話すること。このような、日頃の当たり前の行動そのものが、僕やおじさんたちの安心につながっているのではないだろうか。だからこそ、僕にももっと気軽に、周りの人たちの安心につながる行動を取れるのではないだろうか。僕はそう考えた。

名古屋の地下鉄のある駅で、お年寄りが乗車してきたことがあった。混み合った車内で座席に座っていた僕は、「席をゆずろうか」「どうしよう」とドキドキして、体を動かさないでいた。すると、前の席に座っていた大人がすっとこしを上げ、

「どうぞ」

と優しく声をかけ、席をゆずっていた。その後、列車は、何事もなかったかのように、いつも通りガタゴトと前に進んでいった。

僕は、胸がドキドキしながら、思ったことを行動には出せなかった自分自身にいら立ち、心がモヤモヤしていた。

「周りの人々の安心につながる行動が、人々の笑顔や幸せに結びつくのだ。」このように意識できた今の僕は、あの時とは違った一步をふみ出せそうな気がする。そしていつか、地下鉄の列車の中で見た大人のように、周りの人々のためになる行動を、ためらいもなくてできる人間となれるよう、今は身近でできること一つ一つにまっすぐ向き合い、周りの人々が笑顔になれるような一步を、しっかりとふみ出していきたい。

祖母と認知症

清須市立清洲小学校五年

澤村 美咲

私には、大好きな祖母が二人います。一人は六十代で、元気に過ごしています。もう一人は八十代で、身体がだんだん弱くなってきました。歩く時に腰が曲がったり、目や耳が不自由になってきたり。そんな中でも、私が遊びに行くと、「よく来たね。」と笑顔でむかえてくれます。

いつも通り祖母に会いに行くと、少し変だなと思うことがありました。私の名前が思い出せなかったり、いつもお祝いしてくれたたん生日を忘れていたりしました。また、ある日は、けいたい電話や眼鏡・かばん等をなくして不安な顔で探していました。私はそのような祖母の様子を見ることがなかったので、とてもとまどいました。特に私の名前やたん生日を忘れていたことが、とてもショックでした。祖母が別人になってしまったようでした。私はどうしたらいいのかとまどっていると、父と母が、祖母は認知症だと教えてくれ、「一緒に調べてみようか。」と言ってくれました。

そこで、私は認知症について調べてみました。認知症は、脳の病気で、記憶力や物事を判断する力がだんだん弱くなってしまふ病気だそうです。また、忘れやすくなって、同じことを何度も聞いたり、話したりすると、時間や場所・人が分からなくなること、いろいろなことが分からなくなると、本人も不安になっていることが分かりました。私はこれらのことを知って、認知症とは、記憶がなくなるおそろしい病だと思いました。また、認知症である祖母はとても不安な気持ちだと思い、私にも何



かできないかと考えるようになりました。認知症についてどんどん調べていくうちに、分かったことがいくつもあります。その中で一番印象に残ったことは、認知症になっても周りの人が少し手助けをすれば、できることがたくさんあるということです。私が読んだ本の中では、同じことを言われても同じようにくり返し教えてあげたり、買い物のお手伝いをしたりしていました。私もこれならできるのではないかと思いました。次に祖母に会ったとき、早速学んだことを実せんしてみました。まず、祖母の話をしっかりと聞かずに聞き流してしまいました。くり返し同じ話を聞いていましたが、「さつきも聞いたよ。」と今までみたいに言わず、「そんなんだね。」と初めて聞く話のように聞きました。

「美咲ちゃんは何年生になったの。」と何度も聞かれ、「五年生だよ。」と何度も同じ答えをくり返しました。途中で、もういやだなと思うこともありました。祖母が満足そうに笑っていたのでうれしくなりました。次に、祖母はいつも物をなくしていたので、なくし物をしないようにしたいと思い、箱に物の名前を書いたものを準備しました。「必ずここに置くんだよ。そうしたらすぐに見つかるよ。」と声をかけていっしょに物を置くと、「これは分かりやすいね。」と祖母が喜んでくれました。他にも、大きなカレンダーを用意して予定を書きこめるようにしたり、私や家族のことをわすれないように名前やたん生を書き加えた写真を見えるところにはったりしました。いっしょに買い物へ行ったときは買う物を紙に書いて持っていく、お金をはらうときにはいっしょにお金を数えました。

このように祖母に接していくと、いつも不安そうだった祖母に笑顔が増えてきました。やっぱり祖母は自分自身でも変だなと感じ、不安な気持ちだったんだと思いました。それと同時に、認知症について勉強することで、祖母の力になれた気がしました。何も知らないままだったら、祖母によくない接し方をしてしまったかもしれない。学ぶことはとても大切なんだと感じました。私たちはこれから福祉について学ぶので、他の病気や障害についても学んでいきたいと思います。

車いすで広がる思い出

北名古屋市立五条小学校五年

中島

凜

わたしのひいおばあちゃんは、今年で九十さいになりました。体は元気だけど、足が弱くなってきた、長いきよりを歩くことが大変そうです。それでもひいおばあちゃんは、

「まだ歩けるから大丈夫。」

と言って、なかなか車いすやつえを使おうとはしませんでした。

去年、家族で飛行機に乗って旅行に行くことになりました。空港はとも広くて、出発ゲートまではかなりのきよりがあります。ひいおばあちゃんは、

「大丈夫、歩けるよ。」

と言って、がんばって歩いてくれたけれど、あとからつかれが出て、飛行機の中で体調をくずしてしまいました。目的地に着いて飛行機をおりたとき、空港の人が車いすを用意してくれました。はじめは、車いすに乗ることを遠りよしていましたが、無理をしないためにも車いすに乗ることになりました。はじめて車いすに乗ったひいおばあちゃんは、ちょっとはさかそうでした。

「悪いねえ、ごめんね。」

と何度も言っていました。最初は少しはさかそうだったひいおばあちゃんも、車いすに乗って移動するうちに、だんだん表情がやわらかくなっていきました。そのあとも、空港だけでなく、行った先でも車いすのかし出しがありました。そのおかげでひいおばあちゃんは楽に動くことが

でき、私も車いすをおして、いろいろな場所をいっしょに回ることができました。旅行中、いろいろな場所で車いすを借りることができることを知って、家族みんなでおどろきました。前は「歩けないから行けない」と思っていた場所にも行けることができたのです。車いすがあることで、行ける場所がぐんと広がりました。

「車いすってすごいね。わたしにも、まだ行ける場所がいっぱいあるのね。」

とひいおばあちゃんが言うてくれました。ひいおばあちゃんも、車いすで出かけられることのうれしさを感じてくれたようでした。これまであきらめていた場所にもこうしてまたみんなといっしょに行けるようになったことがとても幸せそうでした。私も、ひいおばあちゃんの楽しそうな顔を見て、心からうれしくなりました。

旅行から帰ったあと、お母さんが地いきの社会福祉協議会で車いすを無料で借りられることを教えてくれました。次の旅行のときは、出かける前に車いすを借りて準備しました。そのおかげで、ひいおばあちゃんも最初から安心して旅行を楽しむことができました。その旅行でも、おいしいものを食べたり、おみやげを選んだり、写真をとったりと、たくさん思い出ができました。ひいおばあちゃんが車いすで動きやすくなったことで、家族みんながいっしょに過ごす時間がふえたように思います。私が車いすをおすと、

「ありがとね。うれしいよ。」

とひいおばあちゃんはやさしくほほえんでくれました。

学校でも赤い羽根ほ金活動があり、ほ金の意味について学びました。その中で、車いすを買うお金などにも使われていると知り、私がかれまですてしてきたお金が、ひいおばあちゃんや他の人の役に立っていることを知ってまたうれしくなりました。

家族でいっしょに過ごす時間は、私にとって宝物のように大切です。ひいおばあちゃんは足が弱くなってきているけれど、まだ元気です。車

いすがあることで、これからもたくさん場所へ出かけて、思い出を作ることが出来ます。車いすが広げてくれたのは、行ける場所だけでなく、家族の笑顔と楽しい時間だと分かりました。これからも、車いすといっしょに、ひいおばあちゃんとの思い出をふやしていきたいと思えます。





ごみひろいから始まる助け合い

大治町立大治南小学校五年

飯田 有希乃

ある土曜日、わたしは川ぞいのプロギングに参加した。プロギングとは、ごみひろいとジョギングを組み合わせた運動のことだ。いとこにさそわれたときは、せっかくの休日にどうしてわざわざごみひろいのボランティアに行かなければならないのかと思った。その日は雲が一つもない日で、いつもよりとても暑く、それだけで気が重かった。

最初はたばこのすいがらや、空かんやペットボトル、食べ物の容器やふくろなどが多かった。さらにおくに行くと、わたしが想像もしなかったごみが出てきた。それは昔のテレビやゴルフバッグ、こわれて動かない自転車、そして、きちんとまとめられた大量のペットボトルなどだ。どうしてこんなところにゴミをすてるのか。わたしは腹が立ってきて、そして不思議でならなかった。ここならすててもばれない、ばれなければすてもいいと思っているのだろうか。そう考えたのは、大きいごみの多くが木のかげにかくすように置かれていたからだ。

きつと、わざわざこの場所までごみを運んですてに来ているはずだ。わたしは確信した。そして、その人はここにごみをすてることを悪いことだとわかっているのだ。そうでなければ、人目につかないように置いてあることが説明できない。

今みんなで一生涯懸命にきれいにしても、またすぐにごみをすてられてしまうかもしれないと思うとむねがもやもやし、悲しくなった。

そのままごみをひろいながら、わたしは考えた。もしごみをすててい

る人が、ごみのすて方がわからず困っていたらどうだろう。そういう人が周りに助けを求めることができずに、川ぞいにごみをすてているのだとしたら。ごみすて場ではないところにごみをすてるのはもちろん悪いことだけれど、頭ごなしに悪い人だと決めつけるのはちがうのかもしれない。

そういう困っている人たちが安心してくらせるようになるためにはどうしたらよいかを考えるべきではないか。そしてそれは、前に学校で習ったふだんのくらしの幸せを考えるのが福祉だということにつながるのではないかと。

プロギングを続けても、道からごみが完全になくなることはないだろう。でもごみをひろうことで、わたしはこの町でくらす人たちのこと、そして福祉の大切さについて考えることができた。

ごみをひろうことは、ただその場所をきれいにするだけではない。わたしたちの町に住む、みんなのことを考えるきっかけをくれた。困っている人がいたら、だれでも助けてあげられる、そんなやさしい町になるといいなと思った。

プロギングを終えたとき、二時間ほどかけて歩いた道はきれいになり、わたしの心も晴れやかになった気がした。



みんなが気持ちよく生活できるために

知立市立八ツ田小学校六年

野畑 ななみ

この夏、私は福祉の里で車いす体験をしました。今回の体験は三回目の体験でした。私は、四年生のときの初めての体験で、車いすを押す側の大変さ、車いすに乗る側の不安な気持ちは知っています。五年生のときの二回目の体験では、スロープでの体験で、押すときに重く感じることや、乗るときにこわさが増すことを知りました。二回体験してもやはり不安はとれなく、慣れないものです。今年の学校での福祉実践教室では、体験はしませんでした。車いすボランティア、「輪いず」のメンバーの方のお話を聞きました。車いすの方の手助けをすることは、相手も自分も気持ちよくなることなんだと改めて感じました。しかし、自分が不安な状態では、手助けをするときに、相手も自分も不安になってしまいかもしいないと思いました。そのため、もう一度車いす体験をして、不安を少なくする操作方法や、どのように操作されると不安に感じるのかを考えるために、今年も福祉の里で車いす体験をしました。

はじめに、車いすの操作方法を確認した後、実際に車いすを動かしました。いつもなら何も感じない坂でも、車いすを持ちながら下るとなると、一気にこわさが増します。車いすを後ろ向きにして、坂を下ります。車いすの後ろから離れれば、すぐに落ちていってしまうと思うとこわいです。そんな車いすを支えながらゆっくり下りました。車いすに腰を当てながら下ることで、車いすに乗っている人が安心して下れるそうなのですが、そのように行うということは自分の体をななめにして下るとい

うことです。そのため、足が思うように動かず、時間がかかりました。そして、坂を下り切るまでの集中力も必要で、途中で気を抜くと、車いすも自分も落ちそうになってしまいました。ただ坂道を下るだけでしたが、下り終わると、ほっとしました。段差はもつと大変でした。小さい段差で、少し車いすを上げただけなのに、一緒に体験した友達に

「ギヤー」

とさげばれてしまいました。原因は私が声かけをすることを忘れていたことです。最初に「輪いず」の方が、声かけが大切だと言っていました。声かけをすることで、今から何をするのか分かるので、不安が少しでも取り除けるのだと分かりました。

次に車いすに乗って近くの大型店まで行きました。最初に障がい者用トイレに行きました。手すりがたくさんついていましたが、やはり車いすに乗って一人でトイレに行くのは難しいと思いました。その後、車いすに乗って買い物をしてみました。車いすに乗ると目線が変わって高い所にあるものが見えません。そのため、買い物もしにくいと思いました。しかし、いつもは見えていない低い商品を見ることができました。いつも置いてあると思いますが、初めて見るグラスが目に入ってきてとても気に入ったのでそのまま買いました。視点が変わると買う商品も変わるといふ商品の配置について思い出しました。車いすに乗って見える位置が低くなり、相手が取りやすいところに置くという工夫が大切だと改めて気付きました。また、店によって通路がせまく、とび出ている商品がありました。何度も商品に当たりそうでひやひやしました。自分は悪くなくても商品に当たってしまった場合には、申し訳ない気持ちになりました。そのような不安を取り除くことも大切だと学びました。

不安を取り除くために技術だけでなく、その人を思いやって、その人の気持ちを想像しながら操作することが必要だと思いました。手助けをした後に、やってもらってよかったな、やってよかったな、と思えるようにしていきたいです。障がいがあっても、なくても、みんなが気持ち



よく生活できるようにしていけたらいいです。



みんなちがって、みんないい

知立市立来迎寺小学校六年

浦田 凧

みなさんは、「私と小鳥と鈴と」という詩を聞いたことがありますか。今から約百年前の大正時代に、金子みすゞさんがよんだ詩です。

私がこの詩を知ったのは、今年の離任式です。異動になられる先生が、この詩を朗読してください、とてもいい詩だな、と感動しました。特に、最後の「みんなちがって、みんないい」という言葉が、私の心に深く響きました。帰宅後にインターネットで調べてみると、この詩には、この世にあるものは、誰一人、何一つ、同じものはなく、だからこそみんなすばらしい、という思いが込められていると知りました。

この詩がなぜ私の心に響いたのかというと、「みんなちがって、みんないい」という言葉が、自分のことを認めてくれているような気がして、安心したからです。

私は、生まれつき足が悪く、歩いたり走ったりするといった「普通」のことが少し苦手です。四年生の頃から日常生活には松葉づえが必要になりました。体育の授業も見学することが増え、クラスメイトが運動している姿がうらやましく感じてしまったり、参加できないことにさみしい気持ちになったりしました。みんなとちがうということを認めたくなくて、目立たないようにしたり、迷わくをかけるのが嫌で、遠りよしてしまったりすることが続き、自分のことが少しだけ嫌いになってしまいました。

そんなとき、友達にさそわれてレジン工作を始めました。初めての作

品は、ガタガタしていて理想とはほど遠いものでしたが、少しずつ自分のイメージに近づけていくことがとても面白くて、すぐに夢中になりました。家の中で過ごすことが増えたタイミングだったこともあり、それから毎日のようにレジン作品を作るようになりました。作品作りをくり返すうちに、友達から

「この作品どうやって作ったの？」

「作り方教えて。」

と言われたりするようになりました。みんなから頼られたり、ありがとうと言われることが増え、少しずつ自分に自信をもてるようになりました。自分の得意なことを活かして、いろいろな人の役に立つことができたから、歩くのが苦手でも、他のことで人の役に立てばいいと考えるようになりました。すると学校の授業や行事の中にも、さまざまな役割があることに気がつきました。

例えば、五年生の運動会。リレーに参加することはできなかったけれど、放送委員としてリレーの実況を担当しました。サッカー指導会では、応援団として絵を描いて、みんなにプラカードとして持ってもらいました。そうした役割のおかげで学校生活はとても楽しいものになりました。

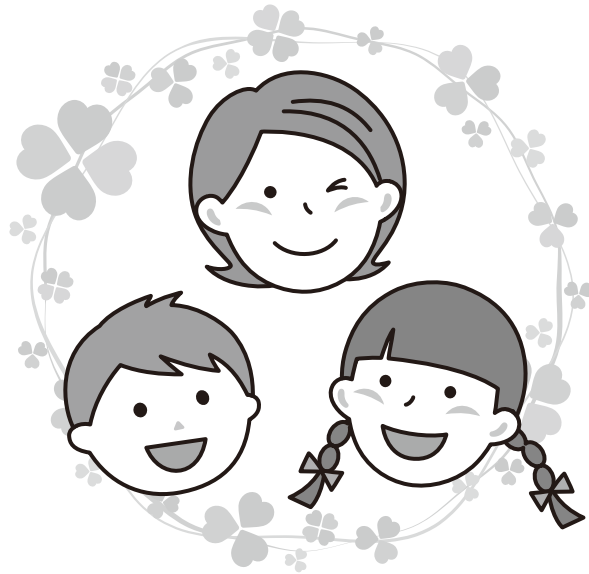
授業でジェンダーについて学んだときのことです。目には見えない、さまざまな背景をもつ人たちがいて、その違いを否定することなく、個性としてお互いを尊重し合うことが大切という内容でした。周りに期待される役割に関わらず、自分の心に素直に生きること、それはとても尊重されるべきなのだということを知りました。いろいろな人がいるからこそ、社会が成り立っているのだと分かりました。

金子みすゞさんの詩のことを母に話したとき、

「ちがうというのは特別ということ、特別って英語でスペシヤルって言うんだよ。」

と教えてくれました。「みんなちがって、みんないい」それぞれの存在こそがスペシヤルで、他の誰とも似ていない特別な存在なんだ、と思える

ようになりました。これからもこの気持ちを胸に、生活へ活かし、楽しく過ごしていきたいです。





私と妹

清須市立西枇杷島小学校六年

加藤 由依菜

私の妹は、食べることが大好きな小学一年生。元気でお茶目なダウン症ガールです。大好物はのりたまごはん。顔中に米粒をつけながら、スプーンを一生懸命使って食べています。知的障害や、筋力が弱いなどの特性があり、標準よりもゆっくりなペースで成長しています。母は「妹ができることを少しでも増やしてあげたい」と、生後間もない頃から、知育や体力作りなどに積極的に取り組んできました。その効果もあってか、妹はしっかり者の世話焼き、我が家のムードメーカーで、いつも周りを笑顔にしてくれます。

私にとって妹がいる生活は日常で、なんら特別ではありません。しかし、一緒に外出すると、特別と感ずることがあります。例えばこの夏に家族で大阪・関西万博に行った時のことです。障がい者用駐車場を使い、パビリオンに入る時は優先レーンを利用しました。普段と変わらない元気な妹に感じましたが、体温調節が暑さに弱く、長時間並ぶことが難しいと両親から聞きました。優先レーンなどのサポートがあったおかげで、家族全員が体調を崩すことなく、朝から夜まで安心して万博を楽しむことができました。

妹は、絵本やお絵かき、ダンス、歌、ピアノなど、たくさんのお事に挑戦しています。「勉強する」と受験生の様にカリカリと文字や図形をかいている姿も見られます。そんな好奇心旺盛な妹ですが、同年代のお友達と比べると、勉強も運動も苦手です。私と同じ小学校ですが、通常学

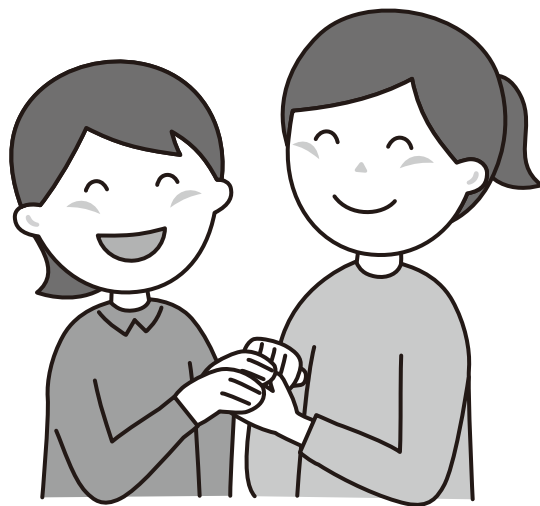
級ではなく、特別支援学級に通っています。六年生の私と特別支援学級は同じフロアなので、毎日元気な声が聞こえてきます。妹のすごいところは、年齢や性別問わず、誰とでも笑顔で接することができることです。特別支援学級には、コミュニケーションが苦手で、通常学級になじめない子もいます。両親が子どもの頃は通常学級の中で変わった子で済まされていたようですが、今は特性がある子として一人一人に合った特別支援教育等を受けることができます。

私の妹は、0歳の頃から療育施設などいろいろな福祉サービスを利用して、現在は放課後等デイサービスに通っています。放課後等デイサービスは、障がいや発達に特性のある子どもに対して、様々な支援を提供する福祉サービスの一つです。自宅や学校ではできない種々の体験を通して、できることや知識が増え、成長して帰ってきます。妹はいつも「楽しかった」と笑顔で話してくれるので、実際にどんな活動をしているのか気になり、見てみたくなりました。妹の利用先の施設にお願いすると、快く引き受けて下さり、福祉体験ができる貴重な機会をいただきました。

自分から希望したものの、個性豊かな子ども達とどう接したらよいか、不安に思いながら施設に向かいました。顔を合わせると、みんな元気で人なつっこく、一気に緊張が解きました。言葉や気持ちうまく伝えられない子ども達に苦戦しつつも、各々の個性に合わせて接している先生方の姿がとても印象的でした。やる気を出させるために、何気ない行動や遊びの中に学びを取り入れ、楽しんで療育に取り組める工夫をしているそうです。先生は、「元気に来て笑顔で帰ってくれ、成長を見届けられることが、この仕事で一番嬉しい」と話してくれました。

普段の妹とのやりとりと同様に接しただけで、特別なことは何もなかったのですが、先生が私のことを「個性のある子どもたちと接することがとても上手」とほめてくださいました。妹と過ごすことで、私自身も自然と成長しているということに気付かされました。

障がいや特性があってもなくても、私達みんな一人では生きられず、お互いに支え合うことで、共に成長できるのだと思います。相手の思いに寄り添い、優しく手を差し伸べられる人になり、一緒に成長していきたいです。



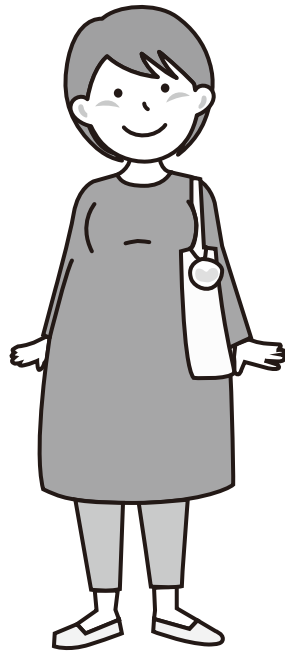
マタニティマークのたいせつさ

弥富市立十四山西部小学校六年

加藤 莉緒奈

わたしは、ショッピングモールで買い物していると妊婦さんを見かけることがあります。妊婦さんのカバンには、あるマークがついていることに気づきました。調べてみたらマタニティマークというのだそうです。このマークは、周囲に妊娠していることを知らせ、配りよをうながすためのマークです。電車やバスなどを利用する時、お腹が目立たない妊娠期間に周囲に気づいてもらいやすくするために使われています。

わたしが、うまれる時のことを、お母さんに聞いてみました。お母さんも、マタニティマークをつけていたそうです。そして、マタニティマークを見た、おばあさんが、席をゆずってくれたことがあるそうです。わたしがお母さんのお腹にいた時、どんどんおなかが大きくなって、起き上がることが大変だったそうです。また、足がむくんだり、赤ちゃんが動くといえなかったそうです。わたしは、この話を聞いて、妊婦さんは、身体にいろいろな変化が出てきて、大変な思いをしていることが分かりました。マタニティマークをつけて、多くの人が、妊婦さんにやさしく声をかけてあげられるといいなと思いました。ほかの妊婦さんほど思うているのか調べてみました。すると、マタニティマークをもらえらうれしい気持ちと、不安な気持ちがあるのだそうです。たとえば、座席をゆずらないといけないと思わせてしまうと申し訳ない気持ちにならうれしいです。そして、まだお腹が出ていない時につけるのを、ためらうてしまうのだそうです。わたしは、妊婦さんがうれしい気持ちでつけて



いるのだと思っていましたが、そうではない気持ちがあることを知りました。

しかし、まわりの人たちがマタニティマークに気づいて、もっと声をかけてあげられると妊婦さんも安心できると思いました。そして妊娠したはじめの時期が、つらい時期なのだそうです。だからお腹が目立ってなくても安心してマタニティマークをつけてもらいたいです。わたしは、マタニティマークのことを調べてみて、妊婦さんをもっと安心できる社会になるといいなあと思いました。もし、どこかで、妊婦さんを見かけたら、わたしもやさしく声をかけたいと思います。

「ぶつう」って何だろう

幸田町立深溝小学校六年

太田 穂香

私のおばあちゃんはさいほうがとくいです。私が、

「ゆかたがほしい。」

と言ったら、おばあちゃんの昔のゆかたをリメイクして作ってくれました。でも実は、おばあちゃんは、片方の目がほとんど見えません。以前、目の病気になったからです。そのせいで、小さい文字が読めません。自分で字を書くこともとても大変そうです。なので、必要な時に手助けをしています。例えば、レトルトの素に書いてあるレシピを読み上げたり、買い物で買うものを書く時に大きな字で書いていたりしています。それなのに、

「せつかくだから作ってあげたい。」

と言って、目が見えにくいはずなのに、八か月もの時間をかけて、ゆかたをリメイクしてくれました。

私自身はずっと目が良かったのですが、だんだん視力が下がって、ついにメガネをかけることになりました。眼科の先生には、

「便利な道具だと思って使えばいいんだよ。」

とはげまされたものの、私は学校へメガネをかけていくのがいやでした。メガネをかけると、視力が落ちたことがクラスのみんなに分かってしまいます。それに、メガネになったなんてかわいそう、ぶつうとちがうと思われてしまいそうで、とてもこわかったからです。

初めてメガネをかけていく日の朝、とてもきんちょうしていました。

朝ごはんがいつものようには食べられませんでしたが。でも、実際にかけて行ってみると、みんなの反応は私の想像とちがっていました。仲が良い友達だけでなく、ふだんたくさん話すことがあまり無い子まで、

「メガネにしたんだね。似合ってるよ。」

「メガネ姿もかわいい。」

とあたたかい言葉をかけてくれました。いつものように接してくれたことで、気持ちが高くなって、次の日から当たり前のようにメガネをかけて行くことができました。私は、ふつうじゃないと思われたり、特別に見られたりすることを心配していました。そう考えてしまったということは、心のどこかでハンディキャップのある人をふつうとちがう、と区別していたのかもしれない。その時、

「ふつうって何だろう。」

と思いました。

私は、おばあちゃんに接する時、ふつうじゃない、特別だ、と思うことはありません。きっとそれはおばあちゃんとは家族で、それが当たり前のことだと思ってるからだと思います。

「ふつう」について考えていたときに、私が尊敬しているピアニストの辻井伸行さんがヒントになりそうなことを言っていたなと思い出しました。辻井さんは国際的なピアノコンクールで賞をとっている有名なピアニストですが、生まれつき目が見えません。CDに付いているブックレットを読んでみたら、

「音楽をする上で目が見えるとか見えないとかはあまり関係ないと思う。盲目の天才ピアニストと呼ばれるより、ひとりでも多くの人に演奏をきいてもらえる、本物のピアニストでありたいと思う。」

と書いてありました。前に読んだ時は、特別気に留めていなかったけれど、この言葉には、「特別あつかいしないでほしい」という辻井さんの強い思いがこめられていると感じました。

人はみんな、身体や物事の考え、生活環境などがちがいます。だから、

「ふつう」も人それぞれちがうんだということに気がつきました。自分が「ふつう」だと思ってることは、他の人にとっては「ふつうじゃない」のかもしれない。自分の「ふつう」で、人を区別して、傷つけないようにすることが大切なのではないかと思えます。そして、その人自身をよく知って、尊重していきたいです。





歌でつながる心

瀬戸市立幡山中学校一年

村尾 華穂

私は幼稚園の頃からミュージカルを習っており、その活動の一つとして、メンバーと一緒に福祉センターでボランティアをしています。月に数回、歌や体操、手遊びを通して高齢者の方々とふれあう時間をもっています。

初めてこの活動に参加したときは、正直、うまくできるか不安でした。舞台とは違い、お客さんが観客席に座って拍手する場面ではすぐ目の前に高齢者の方々がいて、表情も反応も直接感じられるからです。

けれども、舞台上で歌うときと同じようにしっかりと声を出し、メンバーと息を合わせて歌い始めると、施設全体がふわっと温かい空気に包まれていくのを感じました。歌はこんなにも人の心を動かすのだと、その瞬間に気づかされたのです。

歌っていると、高齢者の方々が自然に笑顔になり、手拍子をしてくださいます。中には静かに目を閉じて曲に聴き入る方もいます。ミュージカルで学んでいることが、こうして人の心に届いているのだと思うと、私も胸が熱くなります。

ある日、昔の流行歌を歌ったとき、一人の方が、「懐かしい。」

と言いなながら涙を流されました。その曲は、その方が若い頃によく聴い

ていた歌だそうです。

「あの頃のことを思い出して、本当に嬉しかったです。」

と話してくださり、私も「歌って良かった」と嬉しく思いました。歌は、時間を超えて、人の心に大切な記憶をよみがえらせるのだと感じました。

歌や体操の合間には、手遊びをする時間もあります。「あんたがたどこさ」や「幸せなら手を叩こう」のような簡単な動きのある歌を一緒に行います。最初は恥ずかしそうにしていた方も、隣の方と笑いながら手を合わせて、だんだん動きが大きくなっていきます。曲が終わった後、

「昔、孫とよくやったのよ。」

と話してくださる方もいて、温かい気持ちになりました。こうした小さなふれあいが、心を近づけてくれるのだと思います。

また、歌の後に行う体操も、とても大事な時間です。音楽に合わせて手や足を動かすと皆さんが笑いながら参加してくださいます。

「こんなに体を動かすのは久しぶり。」

と話す方もいて、その笑顔を見ると、喜んでくれて嬉しいという気持ちでいっぱいになります。このような体操の時間は、歌とはまた違う盛り上がりがあります。簡単な振り付けだからこそ、どなたも安心して参加でき、施設全体が一体感に包まれるのです。その瞬間私は、「喜んでくれて嬉しい。これからも皆さんの笑顔が見られるように頑張ろう」と心から思います。

活動が終わると、

「ありがとう。」

「また来てね。」

と声をかけてくださる方が大勢います。そのたびに私は、「やって良かったな」と実感します。帰り道、一緒に歌ったメンバーたちと

「今日も楽しかったね。」

「利用者さんが喜んでくれて、本当に嬉しかったです。」

など、その日の感想を話しながら歩く時間は心が満たされているのを感じ

じます。

この活動を続ける中で、私は「歌や体操、手遊びには、人を元気にし、心を温める力がある」ということを、何度も実感してきました。舞台上で観客に届ける歌と、福祉センターで届ける歌は、形は違っても人の心を動かすという点では同じです。そして、目の前で直接笑顔を見られる喜びは、舞台とはまた異なる深い感動を与えてくれます。

私はこれからも、ミュージカルで色々なことを学び続け、学んだことを生かし、この活動を続けていきたいと思っています。そして、歌や体操、手遊びを通して、高齢者の方々に笑顔と元気を届けられる存在でありたいです。そして、自分自身も、歌の力と人とのつながりの大切さを学び続け、いつかもっと多くの人にその魅力を届けられるようになりたいと思います。



大事な「とよちゃん」

南知多町立南知多中学校一年

濱口 凛

曾祖母の「とよちゃん」は九十二歳です。私が生まれた頃に認知症になりました。私は生まれた時から認知症のとよちゃんと暮らしています。ずっと一緒に暮らしているので、作文に書いて人に伝えるような行動をしているわけではないし、とよちゃんも病気のことを人に伝えられるのは嫌な気持ちになるかもしれないと思い、この作文を書くことは、あまり気が進みませんでした。しかし、母は、

「認知症の人と一緒に暮らしている人にしか分からないことがあるし、とよちゃんは、ひ孫が自分のことを作文に書いてくれて、うれしいと思うよ。」

と言いました。それで、普段の生活を書こうと思いました。

はじめの頃は、何度も同じことを言ったり、同じ物ばかり買ってきたり、自分の部屋に何枚もタオルを持ち込んでいたそうです。

しかし、最近のことはすぐに忘れてしまうけれど、小さかった私に「すずめの学校」とか「うさぎとかめ」などの歌をよく歌ってくれていたそうです。また、お手玉やまりつき、あやとりなどをして一緒に遊んでくれていたそうです。

母たちには、戦時中は食べ物が見つまいもくらいしかなかったことや、住んでいた所の近くに米軍基地があったこと、子供の頃は、わらぞうりを自分で編んでくけれど、一週間程で壊れてしまうので、また新しく編むこと、飼っていた鶏が生んだ卵を、毎朝鶏小屋へ取りに行くことな



どを話してくれて、昔のことはよく覚えているようです。

私は、とよちゃんと話す時、とよちゃんは耳が遠いので、大きな声で優しく、まず名前を呼びます。私が話しかけていると気付いてもらおうためです。それから、ゆっくりと区切って話をします。少しでも話を分かりやすくするためです。母がそのように話しかけているので同じようにしています。

リビングでは、床に物が落ちていないか気をつけています。若い妹がおもちゃやボールを床に置いたままにすることがあるからです。とよちゃんがつまづいて、転んだりしたら大変です。

一緒に出かける時は、車から降りる時など足元に段差がないか確認します。車止めなどに気付かず転んでしまうといけませんからです。危ない所があれば、さりげなくそこを通らないように、また、とよちゃんが気が付くようにしています。

とよちゃんは、デイサービスやショートステイに行くと、私や妹のことをうれしそうに、いつも話しているとスタッフの方が教えてくれました。私もとてもうれしい気持ちになりました。

さて、作文を書くにあたり、「認知症」について少し調べてみました。症状としては、もの忘れがひどい、判断力や理解力がおとろえる、時間や場所がわからない、人柄が変わる、不安感が強い、意欲がなくなるなどがあるそうです。確かに、とよちゃんの症状に当てはまることが多いと思います。日付けや曜日が分からなくなることが多いので、

「今日は、火曜日だよ。」

と教えます。母が見当たらないと不安になるようなので、

「今、買い物に行ってるよ。もうすぐ帰ってくるよ。」と伝えます。

認知症の進行速度は三年から二十年以上と個人差があるようです。少しずつ、できないことが増えてきたとよちゃんですが、家族七人分の洗濯物を、母や祖母より丁寧にきれいに毎日たたんでくれます。たくさん

の洗濯物なので、時間はかかるけれど、それがとよちゃんの仕事です。

これから、少しでも進行を遅らせられるように、安心できる環境で、私たち家族と過ごし、今まで通り、見守って、笑顔で声をかけていきたいと思います。大事なとよちゃんが長生きできますように。



弟の笑顔が教えてくれたこと

一宮市立西成東部中学校二年

大野 未愛

私の弟は知的障害のダウン症を持っています。弟の見た目は、少しつり目で、目と目の間隔が広く、普通の人とは少し異なっています。また言語の理解が遅いなど、発達のスピードがとてもゆっくりです。

ある日、弟と家族でお出かけに行きました。弟は大好きな本屋を見て、笑顔で走っていました。私が弟を追いかけたとき、近くにいた小学五年生くらいの男の子とお母さんの親子の声が聞こえてきました。「ねえ、あの子変だね、かわいそう。」その言葉を聞いた瞬間、私は心の中がざわつきました。弟は言葉を理解する力があまりなかったのです、何もなかったようにニコニコしていましたが、私の心にその言葉が深く刺さりました。弟は何も悪くない。ただ自分らしく楽しんでいただけなのに。なぜ「変だね。かわいそう。」と言われなければならないのか悔しくて悲しくて、その親子に何も伝えられなかった自分にも腹が立っていました。弟のことをそんなふうに見ていた人がいたと思うと、胸が、今にもはち切れそうなくらい悔しくなりました。学校へ登校しても、私はずっとその言葉が頭から離れませんでした。どうしてそんなふうに言われるんだろう。先生に話すと、少し驚いた表情をして、静かに言いました。「昔から、そういう目で見える人はいたよ。でも、悪気があつて言つてるとは限らないと思う。知らないから、そう思ってしまう人もいるんだよ。」その言葉を聞いて、私は少し冷静になりました。確かに、私も弟と暮らしていなかったら、障害についてちゃんと考えたことがあったかどうかわか

りません。「知らない」ということが悪気のない言葉で簡単に人を傷つけてしまうこともある。そう気づくことができました。

その後、学校で福祉実践教室があり、車いす体験や、聴覚障害について学ぶことができました。動けない、聞こえない、ということだけでこんなにも不便なんだと知ることができ、とても良い経験ができました。同時に、弟も日々また違った不便や困難と闘っているのだと、改めて気づきました。少しだけ、弟の気持ちに近づけた気がしました。弟は、言葉でうまく伝えられない分、表情やしぐさで気持ちを伝えてくれます。笑っている時、うれしいことがわかるし、表情が暗いと怒っていることがわかります。私が落ち込んでいると、一緒に遊んでくれることもあります。そんな弟の存在に、私は数えきれないほど救われてきました。私は、弟がいることで、思いやりについて深く学びました。そして、自分と違う人の気持ちを考えることの大切さを知りました。弟は「できないこと」よりも「できること」がたくさんあります。人を笑顔にする力、その場を明るくする力、それは誰もができるとは限らない弟だけのすごい力だと思っています。だから私は、誰かがまた「かわいそう」など言うてきたときには、「弟は、かわいそうなんかじゃない。すばらしい心を持った、自慢の弟です。」とはっきり伝えたいと思います。そしてその言葉が、少しでもその人の心に届いてくれたらいいなと思います。また少しでも多くの人に障害について知ってもらうために恐れず、弟のことや福祉実践教室で学んだことを伝えていきたいと思いました。

この出来事を通して私は、「違い」は決して悪いことではないと改めて気づきました。そして、「違い」を知り、認め合うことが福祉にとって大切な一つだと思えます。弟は私にとって世界でいちばん大切な存在です。弟と過ごす日々の中で、私は多くのことを学び、優しさや思いやりの気持ちを考える力を教えてもらいました。もし、弟がいなければ、私はこんなふうになんか人に気持ちに寄り添おうとは思えなかったかもしれません。弟が私の人生にいてくれること、それは私にとって、大切な大切な宝物



です。これからも、弟と一緒に笑って、泣いて、手を取り合って生きていきたいと強く思いました。いつか弟が困っているときには、誰かがそっと手を差しのべてくれる、そんな優しい社会になってほしいと心から願っています。私も誰かの力になり、たくさんの人々を救うことができるように成長していきたいと思います。私は最高な弟と過ごすかけがえないこの時間を、これからも大切にして生きていきたいと感じました。



寄り添う心と支える技術に導かれて

瀬戸市立水野中学校三年

谷口 雄詠

僕の家庭は、「福祉」が当たり前に存在している。母は放課後等デイサービスで働き、父は障がいをもつ子ども達の為の療育支援器具を開発している。そんな両親の背中を見てきた僕にとって、「障がい」という言葉も、小さい頃からとても身近だった。

母の職場である放課後等デイサービスには、小学生の頃から夏休みや冬休みに毎年通っている。最初は、ただ母と一緒に職場に行き、宿題をしたり遊んだりするだけだったが、学年が上がるにつれ、そこへ通う子ども達の存在が身近になっていった。そして「何故この子はそんな行動をするんだろう。」等と、子ども達の様子がどんどん気になるようになっていった。例えば、言葉をあまり発しない子、急に怒り出してしまう子、自分の気持ちをうまく伝えられない子等、それぞれに個性的だ。皆、自分の世界をもっていて、それを少しでも分かりたいと思ひ、聴いているうち、ふとした瞬間に心を開いてくれるような場面もあった。

中学一年生の夏休み、僕が風景画を描いていると、小学二年生の男の子がじつと僕の手元を見ていた。僕が描いたひまわりの絵を指し笑顔になったその表情が、とても印象に残っている。「何かしてあげなくては。」という考えより、「一緒にいる。」という関わり方で、こんなにも温かい気持ちになれるんだと初めて知った。それからは何となく母の仕事に付いて行く事に楽しさを覚え、それと同時に相手との関わり方にも興味を持ち始めた。子ども達一人ひとりに合わせて、支援の内容を変えていく

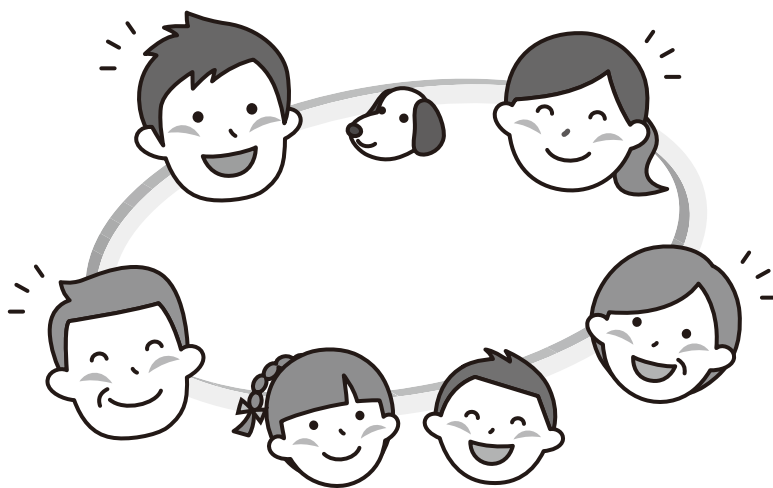
母や他の支援員さんの姿を見て、簡単な仕事ではないと思うと同時に、「こんな風に寄り添うって、子どもが幸せになるし、本当に凄いことだ。」と感じていた。

一方で、父の仕事にも驚かされたことがある。父は製造業の会社で開発の仕事をしている。そんな父が数年前、「社内コンペで、療育支援器具の企画を出してみた。」と僕に話してくれた。「自分の技術で、障がいを持つ子ども達の役に立ちたいなと、お母さんの仕事を見ていてずっと考えていたんだ。」と。その父の提案は採用され、会社としても福祉の分野に新たに取り組むことになったそう。そして父が中心となって開発した療育器具は、実際に母の職場で試運転されることになり、僕もそこに参加し手伝った。療育器具を前に、戸惑っていた子供達が、少しずつ興味をもち始め目を輝かせて楽しむ姿を見た時、父は、「自分の作ったもので、子ども達が笑ってくれるって、本当に嬉しいことだよ。」と笑顔で言った。その言葉は、僕の心に深く残っている。そして、その療育器具が、大阪・関西万博でも紹介されることになった。製造業の会社が福祉の道を切り開いた、その最初の一步が父の小さな提案だったことを、僕はとても誇りに思っている。父が「技術で人を支える。」ことを選び、母が「寄り添って支える。」ことを実践している。その両方を間近で見えた僕は、福祉の持つ人の力だけじゃない、「知恵と技術」の力に気付く事ができた。

福祉とは、特別な資格や立場がなければできないことだと思っていたが、母は「あなたがいてくれるだけで助かることがあるんだよ。お手伝いありがとうね。」と言ってくれる。また、父は「やってみたいという気持ちから、新しい発見や新しい道が拓けるんだよ。」と教えてくれた。誰かの役に立ちたいという気持ちがあれば、どんな立場からでも福祉に関われるのだと、この体験を通じて強く感じた。

僕は今、進路について考える時期に来ている。まだ将来の職業は決めきれないが、誰かの気持ちを考えられる人間になりたい。そして人の役

に立てることをしたいという思いが、自分の中で確かに芽生えている。小学生の頃から過ごしてきた放課後等デイサービスでの経験と、父の挑戦を側で見てきた事は、ただの家族の思い出ではなく「原点」になった。福祉は、優しさや思いやりを形にしていける仕事だ。母のように障がいと向き合い、寄り添う人もいれば、父のように支える道具を生み出す人もいる。自分に素晴らしい体験を授けてくれる両親に心から感謝し、僕も自分にしかできない形で、誰かを笑顔に出来る大人になりたいと思う。





相手の気持ち

春日井市立柏原中学校三年

山田 若奈

「相手の気持ちをよく考えて行動しましょう」だれもが一度は言われたことがある言葉なのではないでしょうか。私は幼いころから何度も聞いてきましたが、これはなかなか難しいことだと思えます。考えるだけならできるかもしれませんが、考えたことが正しいとは限りませんし、それを行動に移すことができるのかと言われると難しいと感じてしまうのです。しかし、小学生のときのある出来事がきっかけで「相手の気持ちを考えて行動する」とはどういうことなのか、わかってきたように感じています。

左手首を骨折したときのことです。常に片手が使えないので、治るまでの間は様々な場面で、周りの人に助けってもらっていました。学校に行っても同じです。教室移動や掃除、給食など様々な場面で友達が私のことを気にかけて、助けてくれました。とても嬉しかったし、ありがたかったけれど、何でも手伝ってくれる友達に対して私は、自分でできることは自分でやりたいのになと思ってしまうことがよくありました。私は、自分でやったら時間がかかるし、みんなも私のためを思ってくれているのだから仕方がないと諦めかけていましたが、ある一人の友達は私の気持ちを理解してくれました。私が

「自分でできるから大丈夫だよ。」
 という時、それ以上は私のことを手伝わす、見守ってくれました。どれだけ時間がかかっても、嫌な顔一つせずにと待っていてくれました。

した。私はその子の優しさに、とてもあたたかい気持ちになりました。そして、私もその子のように、相手に本当に喜んでもらうにはどうすればいいかを考えて、相手の気持ちを尊重して接することができるようになりたいと思いました。

その次の年、特別支援学級の子たちと休み時間に交流する機会がありました。最初はどんな子がいるのだろうかという不安や緊張がありました。でも、いろんな子が「一緒に遊ぼう。」と声をかけてきてくれて、不安や緊張よりも、みんな楽しんでるように思いました。不安や緊張がなくなりました。中には緊張しているのか、あまり話しかけてこない子もいたけれど、私から声をかけて一緒に遊ぶと楽しそうにしてくれて安心しました。ある日、何人かで折り紙を折っていたときです。難しい手順があつて、うまく折れない子がいました。そのような時は、代わりに私が折るのはなく、ゆっくりと一緒に折ったり、その子の折り紙に折り筋をつけて折りやすくしたりしました。できる限りその子自身の力で折れるように工夫することで、完成したときの達成感を味わってもらいたかったからです。その子は折り紙が完成すると「できた！」と言って見せてくれました。先生に笑顔で見せに行ったりしていました。その姿を見て、私まで嬉しい気持ちになりました。

さらに時がたち、中学生になっても小学生の時の経験をいかすチャンスが訪れました。クラスメイトに、足の手術をして歩いたり階段を昇り降りしたりするのが大変な子がいたので。私は、その子のことをサポートしつつ、他の友達に接するときと同じように接することを心がけました。足の不自由を気にせず、みんなと同じように過ごせることが、その子にとつての喜びになると考えたからです。例えば、教室移動の時なら、無理をさせないようにゆっくり歩きながらも、他愛もない話をたくさんして笑い合いました。私も楽しめて、その子も笑顔になってくれる、とても幸せな時間でした。

このような経験を通して私は「相手の気持ちを考えて行動する」とは

どうということなのか、少しずつわかってきたような気がしています。そして、この考え方は小さな子どもや高齢の方、障害をもっている方などと触れ合うときに、特に重要になってくると思いました。また、これができる相手にも喜んでもらえるだけでなく、自分まであたたかい気持ちになれることを実感しました。これから先も相手の気持ちに寄りそった行動を心がけていきたいと思っています。みなさんも、自己満足の優しさではなく、一度、相手の立場に立って、相手が一番してほしいことは何かを考える優しさをもってみてください。きっと、相手の気持ちを考えて行動する喜びが感じられるでしょう。



支えること、寄り添うこと

高浜市立高浜中学校三年

杉浦

杏

近年、日本各地で大きな地震が発生しています。石川県の能登半島地震や、東日本大震災、熊本地震など、多くの人が命を落とし、家や家族を失いました。災害が起こるたびに、ニュースを見ながら「自分には何ができるのだろう」と考えてきました。今、私の住む地域では大きな地震は起きていませんが、「もし明日、自分の町で大地震が起きたら？」という問いは、私にとって他人事ではありません。

災害は、いつ、どこで起きてもおかしくありません。そして被害を最小限に抑えるためには、日頃の備えと、災害時における「助け合いの心」がとても大切だと、私は考えています。そこで私は、もし自分の住む町で地震が起こったとき、どんなボランティアができるか、今から考えてみたいと思います。

まず、私が一番に意識したいのは「身近な人を守ること」です。自分の家族、近所の高齢者、小さな子どもたちなど、災害時には弱い立場になる人たちを優先して助けたいと思います。例えば、お年寄りの家に安否確認に行ったり、荷物を持って避難所まで一緒に移動したりすることは、中学生の私にもできることです。声をかける、手を貸す、話を聞く。そんな小さな行動が、人の命や心を支える大きな力になることを、これまでの災害の教訓から学びました。

次に、避難所でのボランティア活動です。地震が起きると、多くの人が避難所で不安な生活を送ることになります。そんな場所で私ができる



ことは、掃除や物資の整理、配布の手伝い、そして何より「元気に声をかけること」だと思います。特別な資格や技術がなくても、「笑顔」や「気配り」は誰にでもできるボランティアです。避難生活はストレスがたまりやすいため、周りにやさしく接することが、人々の心を和らげる大切な支援になると信じています。

また、私は少しずつ防災についての知識も身につけていきたいと考えています。たとえば、応急手当やAEDの使い方、簡単なトリアージ（けが人の優先順位の判断）、避難所での感染症対策など、もしものときに役立つ知識です。災害時には医療スタッフも限られます。だからこそ、地域の人たちが「ちょっととした知識」を持っているだけで、救える命が増えるかもしれないのです。

最近では、スマートフォンやSNSを活用した情報発信もボランティアの一つになっています。正確な情報を共有したり、迷っている人に避難場所を伝えたりするだけでも、大きな助けになることがあります。特に若い世代はデジタルに強いので、自分の得意な分野を生かして支援できると思います。

私は以前、災害ボランティアに参加しました。困っている人を助けたいという思いと、今、自分には何ができるのかを考えたいという思いで参加をしました。土砂崩れや、水災害などの話を聞いて大変なんだなと思いました。

そして何より、私が忘れずにいたいのは、「支援には寄り添う気持ちが必要」だということです。ただ物を届けるだけ、ただ作業するだけではなく、「今、この人はどんな気持ちなんだろう」と想像すること。辛い思いをしている人に、寄り添う姿勢が本当の支援につながると、私は信じています。

地震が起きたら、学校も休校になり、家の中も混乱して、自分自身も不安になると思います。それでも、助け合う心を忘れず、周りの人と協力することが、町の復興や心の支えにつながるはずです。きっと大人た

ちも疲れや不安を抱えていると思うので、そんな中で「私にもできることがある」と思いながら行動したいです。

災害ボランティアは、特別な人だけができることではありません。体が元気で、気持ちがあれば、誰にでもできることです。むしろ、若い私たちがだからこそ、元気や笑顔を届けることができるのだと思います。

私はこれからも、防災について学びながら、「もしも」に備えて行動していきたいです。そして、地震が起きたときには、ただ助けを待つのではなく、「誰かの助けになる人」になりたいと思います。



祖父の言葉

清須市立春日中学校三年

小島 涼伍

「どうして僕のおばちゃんはあんなに介護してくれているおじいちゃんに対してひどいことを言っているのに、おじいちゃんは嫌な顔一つ見せないのだろう。」

三年前に亡くなった祖母は、認知症でした。認知症のせいで、祖母は僕のことや、祖母自身のこと、自分の家族のことも分かりませんでした。小学校四年生の僕は、どうして祖父は祖母の介護をしていて、嫌な顔一つ見せないのだろうと不思議に思っていました。

小学校低学年くらいの僕は、祖母が認知症だと分かっていたけれど、祖父に対する言動や、いつの間にかどこかへ行ってしまう行動に驚いていました。例えば、飼っている犬の散歩に先ほど行ったばかりなのに、また散歩に行こうとしたり、さっきまで優しい態度で接していたのに、急に祖父への態度が横暴になったりしていました。祖母の介護は冗談でも容易とは言えませんでした。そんな祖母のことを幼い頃の自分は少し嫌だなと思っていました。祖父への横暴な態度はもちろん、一番気になっていたのは食べ物汚く食べることです。大人なのに、汚い食べ方になってしまうのかと悲しい気持ちになっていました。昔、僕は祖父に「おばあちゃんの介護をして、ひどいことを言われたりして辛くないの?」「嫌いになったりしないの?」と聞いたことがあります。すると祖父は「そりゃあ横暴な態度を取られて少し悲しくなったりすることはあるけれど、嫌いになったことなんて一回もないよ。逆にまだ生きていてくれて感謝

しかないよ。」と言いました。その言葉に僕は衝撃を受けました。介護者は肉体的に大変だということは分かりますが、僕は肉体よりも精神的に厳しいという状況が多いと感じます。なぜなら、介護者は被介護者の状態によりますが、就寝するまでつきっきりで介護をしなければならぬことが多いので、介護者の睡眠時間が削られ、体力がとて必要になるからです。また、会話がうまくつながらない相手とずっと一緒にいることで心がすり減り、鬱になってしまいう人が多いのではとも思います。しかし、祖父は祖母に対して「感謝しかない。」という言葉を発表しました。僕はこの言葉を聞いて、愛する人が自分のことを分からなくなったとしても、家族への愛情や思いやりは一切冷めないのだと思いました。

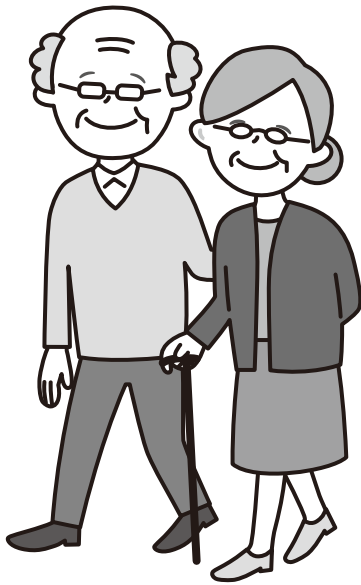
この祖父の言葉をきっかけに、僕は祖母の介護を手伝うことにしました。はじめは慣れない作業が多く、祖父の行動を見よう見まねで行いました。祖母にご飯を食べさせているとき、僕が「おいしい?」と祖母に聞くと、頷いてくれたので嬉しい気持ちになりました。そのことで、僕はなんとなく祖父が言っていた言葉の意味が分かった気がしました。それは、自分の家族がどんな状態であろうと決して心の底から嫌いになることはないのだということです。その後、僕は祖父の言葉をどう解釈したのかを自分なりに考え、自分の言葉で伝えました。すると祖父は「そうだな。自分の家族がどんな状態であろうと愛し続けるのが家族だからな。」と言ってくれました。少しでも僕の愛情が祖母に届いていると嬉し

いです。中学生になった今、僕にできることはちっぽけなことかもしれませんが、けれど、そのちっぽけなことでも、僕は行動に移していけるように日々努力していきたいです。そのためにもまずは、何事についても知ることが大切だと思います。今回、祖母がいなければ僕が認知症について小さい頃から知ることはありませんでした。また、僕の疑問に対して祖父がまっすぐ向き合い教えてくれたので、今こうして自分と向き合えていると思います。今後も、何事も自分の目で確かめ、考え、その中で思いやり



についても学んでいきたいです。

今回の実体験での家族への愛情を通して、「思いやり」について学びました。実際に介護センターや世の中には介護に関わる仕事がどれだけあるのでしょうか。その仕事についてさらに学んで考えを深めていきたいです。そして実際に世の中でどれだけの人が家族の介護について困っていて、どのようなサポートを必要としているのか知りたいです。僕と同じような体験をした人も少なからずいると思います。困っている人たちの話を聞いて、一人で抱え込む人が少なくなることを願っています。人と関わる上で、思いやりを僕は最も大切にしていきたいです。僕の考える思いやりとは、見返りを求めず相手のことを考えてかける言葉や、行動のことです。そんな思いやりをもって、年齢を問わず、誰かのために自信をもって助けられる人になりたいです。相手が何をしてほしいのかわかる人になるために、コミュニケーションを大切に、周りへの感謝を忘れず、心に余裕をもった人になりたいです。



みんなで食べるとおいしいね

知多市立旭南中学校三年

石井 心陽

「みんなで食べるとおいしいね。」

これが私の小さい頃からの口癖だ。家族でご飯を食べる時も、カフェでご飯を食べる時も毎回言っている言葉だ。そんな私は南粕谷ハウスという所で二歳の頃から子ども店長をしている。南粕谷ハウスは喫茶店だが地域の高齢者や子ども、障がいのあるなし関係なく集まってご飯を食べたり、お話をしたり、サロンの活動をしたり、何かの集まりや会議まで、どんなことでもできる南粕谷の憩いの場だ。

三年前、何か新しいことに挑戦してみようという話があった。新メニューや新しいイベントの追加などさまざまな視点からの意見がたくさん出た。その中で選ばれたのは、

「子どもたちの参加を増やせる企画がしたい。」

だった。この発言からできた企画は「子ども食堂」だ。その内容は、中学生以下の子どもたちは百円、高校生以上は二百五十円で一食分のご飯が食べられるというものだ。さらに、毎回メニューを変えるときに子どもたちやスタッフに好きなメニューを聞いたり、お楽しみ会をしたり、バンドの演奏や紙芝居を聞きながらご飯を食べてもらったりするなどのいろいろな工夫をした。そのおかげで毎回三十から四十五人くらいの人たちが来てくれるようになった。来てくれた人たちが、

「すごくおいしいー！」

「こんなに豪華なのに安いね。」

とニコニコしながら食べてくれているのを見て、もっとみんなに笑顔で食べてほしいと思った。そこで思い付いたのが無料チケットだ。けれど、スタッフに

「そんな簡単にはできないな…。」

と言われてしまった。南粕谷ハウスはボランティアで営業しているのでお給料分は引いて安い値段で提供できるが、食材費はかかってしまうから無料は難しいのだ。悩んでいると祖母からとてもよい案をもらった。

「来てくれた大人に協力してもらったら？」

それだ、と私は思った。南粕谷ハウスに来てくれた人に一枚百円で無料チケットを買ってもらい、レジ近くの棚に貼っておく。そしてお金がない子どもや忘れてしまった子どもたちにもちそのチケットを使ってご飯を食べてもらうというやり方だ。それなら百円を払っていることと変わらずに子どもたちは無料で食べられる。早速その案を実行した。名前はオリチケット。「オリ」はハワイ語で「幸福や幸せ」という意味であり、幸せになれるチケットだからそう名付けた。始めてすぐに常連のお客さんが一枚買ってくれた。そこからはとんとん拍子だった。どんどんチケットが貯まっていき、ついに貼るスペースがなくなるくらいたくさん集まった。チケットを使った子たちは、

「ほんとに無料でいいの？」

と言いつつも笑顔でたくさん食べてくれてとても嬉しかった。オリチケットは、イベントでの景品や粕谷っ子スタンプというスタンプ表が貯まったら交換できる景品としても配布をしている。また今では、オリチケットだけでなく、地域の大人たちが募金活動に協力してくれたり、セカンドハーベストというところから賞味期限が近い食材や調味料などいろいろなものをもらうことが増えたりした。そのおかげで、たまに小学生だけでなく中学生以下無料でご飯を食べられる子ども食堂にするなど、子ども食堂の活動は大きく成長している。そして今年、日本福祉大学の大学生たちが企画を立ててくれたのでお楽しみ会も大盛り上がりだった。

その日の昼ご飯を食べている時に、

「みんなで食べるとおいしいね。」

と言ったら、みんなが「そうだね。」と共感をしてくれてとても嬉しかった。

「みんなで食べるとおいしいね。」

という言葉は魔法の言葉だと思う。別にみんなで食べても一人で食べても味は変わらない。一人で食べるほうが好きだという人もいると思う。けれど、みんなで食べるとおいしいと感じるのは、いろいろな人と今日あったことを話したり、コミュニケーションをとったりしながら食べることで寂しさや孤独感がなくなり体だけでなく心も温まり元気になるからだと思う。私はこのような小さい頃からずっと行ってきたことを生かし、これからもこの言葉を大切にしていきたい。また地域のみんなが笑顔になって繋がりをもつことができる活動をずっと続けていきたいと思う。





その人らしい生活を支える

愛知県立宝陵高等学校一年

長野 歩美

今回私は、初めての介護実習を経験し、普段教室では決して学べない多くのことを現場で学ぶことができました。介護という仕事の大変さと同時に、人と関わることの魅力や楽しさ、やりがいを実感し、自分の将来についても改めて考える機会になりました。

実習先は障害のある利用者の方がそれぞれの方に合った作業をする施設で、職員の方々は、一人ひとりに合わせた介護と支援を行っています。最初は、緊張と不安が強く自分に何ができるのか、うまく利用者の方と関われるのかという思いが強くなりました。

そうした中で、ある利用者の方との関わりの中で、戸惑いを感じることもありました。その方は、私が挨拶をしてもこちらに見向きもせず、通り過ぎてしまったり、特定の動作を繰り返していたり、私は「なぜそのような行動をしているのだろう。」「自分の接し方に問題があるのではないか。」と考えていました。しかし、後で職員の方から、「それはその人の障害の特性によるものであり、必ずしもあなたの対応が原因ではない。」と説明を受け、少し気持ちが軽くなりました。同時に、一人ひとりの方の障害の特性を理解することや、理解しようとする姿勢が大切だということも学びました。

利用者の方と実際に接してみても、同じ障害名がついている方でも、

性格や考え方、表現の仕方がまったく違うということも学びました。ある利用者の方は、会話は苦手でも行動で自分の気持ちを表現していたり、別の利用者の方は、ジェスチャーで自分の感情や思いを表現していたりと、それぞれに合ったコミュニケーションの方法があり、言葉を交わすことだけがコミュニケーションではないということに驚きました。こういう障害だからこう接すれば良いという一律的な対応ではなく、その人自身をよく観察し、理解する姿勢がいかに重要かを実感しました。

その中で、私が声かけの仕方を工夫したり、身振り手振りを交えて話しかけたときに、少し利用者の方の表情が和らいだ瞬間がありました。そのとき、「通じ合えた」と感じた喜びは、これまでに味わったことのないものだったと思います。コミュニケーションは、相手に寄り添う気持ちや姿勢が伝わるのが大切だと気づかされました。

また、職員の方がどんな時でもとても明るく、利用者の方の尊厳を守り、その人らしい生活を支えるために努力している姿に強く感動しました。忙しい中でも利用者の方一人ひとりの「声」を丁寧に聴き、その人の思い、感情に寄り添う姿勢は本当にかっこよかったです。

今回の介護実習での経験を通して、介護という仕事のイメージが大きく変わりました。以前は「手助けをする仕事」「支える仕事」という表面的な理解しか持っていなかった私ですが、今では、その人の心に寄り添い、一緒に生活する仕事だと感じています。障害があるから不自由というのではなく、そこにある個性や生き方をどう支えていくかが大切だと学びました。

実習中には、「こうしたら良かった」など失敗してしまったこともありましたが、しかし、その度に職員の方々からアドバイスをいただき、少しずつ自分なりの接し方や視点を持てるようになっていきました。

実習の最終日、ある利用者の方が私の方に来て、「ありがとう」と笑ってくださいました。その笑顔を見た時、とてもやりがいのある仕事だと思えました。困難もあると思いますが、それを乗り越えるだけの価値が、

この仕事にはあると感じました。
今回の介護実習を通して、障害のある方一人ひとりに「その人らしさ」があり、それを尊重することの大切さを学びました。これからもさらに知識と技術を深めていきたいと思います。そして、利用者の方一人ひとりの人生に寄り添いその方らしい生活を支えられる介護福祉士を目指して日々努力していきます。



福祉体験から得た気づき

愛知県立知立高等学校二年

野村

そら

今回、私はデイサービスでの福祉体験に参加しました。デイサービスを選んだ理由は、母がこの仕事をしていたのでどのような事をしていくのか気になり、自分の将来の選択肢のひとつになればいいなと思い選びました。最初は、どのようにお年寄りの方々と関わればいいのか、うまくできるか不安でいっぱいでした。お年寄りの方々と接する機会がこれまであまりなかったため、緊張で胸が高鳴り、少し落ち着かない気持ちで施設に向かいました。体験が始まる前には、職員の方から「お年寄りの方々との接し方」や「心構え」について教えていただきました。例えば、相手の話をさえぎらずに最後まで聞くこと、認知症の方もいるので、同じ話をされてもはじめて聞いたように反応すること、常に笑顔でいることなどです。その説明を聞きながら、「なるほど」と思うと同時に自分にできるだろうかという気持ちになりました。しかし、教えて頂いたことを胸に刻み、いよいよ体験が始まりました。

体験では、主に話し相手としておしゃべりしたり、歩行の付き添いをしたり、食事の配膳を手伝ったりしました。はじめに各テーブルごとの席に行って、お年寄りの方々とお話をしました。趣味の話などを聞いたり、時には私の話をしたり、お話しするのはとても楽しくて時間を忘れるほどでした。最初は会話を続けられるか心配でしたが、相手の話に耳を傾け、時には質問をすることで自然に会話が広がることを実感しました。話を聞きながら、相手の表情から喜んでくれているのを感じられたとき



は、心が温かくなり、こちらまで笑顔になりました。

歩行の付き添いでは、安全に気をつけながら行いました。反対側にも歩行している人がいるので、ぶつからないように気をつけたり、相手の歩くペースに合わせたり、相手の立場に立って考えることの大切さを強く感じました。この経験を通して、相手を思いやる気持ちだけでなく、状況をよく観察して行動する力も求められることを学びました。

食事の配膳を手伝う場面では、食事にも工夫が必要なことを学びました。はじめは小中学校のように器によそって運んでとみんな同じものを食べるものだと思っていました。しかし、同じ料理でも細かく刻んだものや、とろみを付けたものを食べる方がいます。その理由は嚙む力や飲み込む力の関係で細かく刻んだ食事が食べやすい方もいれば、とろみをつけた方が飲み込みやすい方もいるからです。同じ「高齢者」といっても体の状態によって必要な工夫が違うのだと感じました。

さらに、この日のデイサービスではレクリエーションも行われていました。その中で特に印象に残ったのは「色ビンゴ」というゲームです。色のついたカードが床に置かれていてそこにお手玉を投げ、色によって点数が決まるというルールでした。簡単そうに見えて意外と難しく、参加されていたお年寄りの方々は真剣な表情でお手玉を投げていました。しかし、高得点が出るととても喜んだり、みんなが拍手したり声を掛け合ったりする姿や、とても盛り上がる姿も見られたのでレクリエーションの持つ力を強く感じました。体を動かすだけでなく、人との交流や笑顔を生み出す活動が、どれほど大切かを目の当たりにし、福祉の場で「楽しみを共有する時間」が欠かせない理由がわかりました。

こうした一つひとつの体験を通して、私は「相手の話に耳を傾けることの大切さ」「笑顔を生み出す活動の価値」を学びました。体験を始める前は「自分に何ができるのだろうか」と不安ばかりでしたが、終わってみると、相手の表情や言葉からたくさんさんのことを受け取り、自分も少し成長できたと感じました。特に、相手の立場に立って考えることの重要さ

を実感できたのは大きな学びでした。相手の気持ちを想像しながら行動することは、福祉の場に限らず、学校生活や普段の人間関係でも必要なことだと思います。

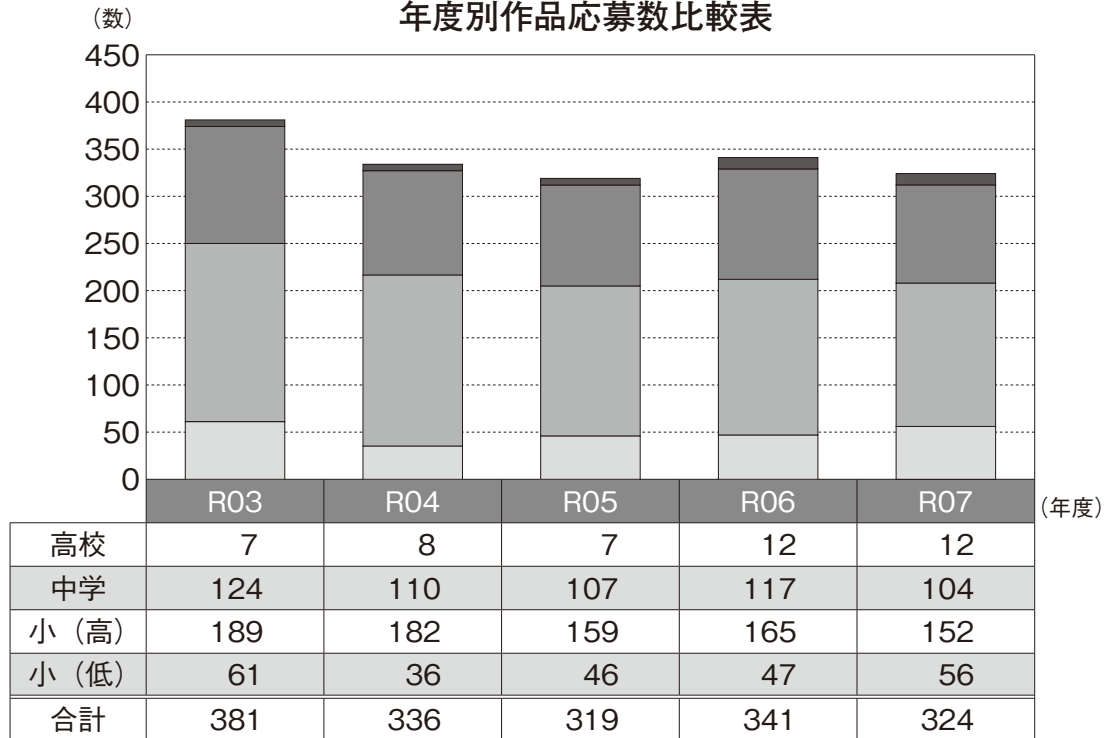
今回の福祉体験は、私にとってただのボランティア活動ではなく、将来の進路について考えるきっかけになりました。デイサービスの仕事内容も分かり、人と支え合い喜びを実感できたからこそ、将来人の役に立つ仕事に就きたいという思いが強くなりました。今回の経験を通して学んだことを将来に生かし、周囲の人に安心や笑顔を届けられるような人になりたいです。



■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 324編

年度別作品応募数比較表



福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

《審査経過》

福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々により依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

飯尾成生 愛知県社会福祉協議会地域福祉部長
 櫻井悟 美浜町社会福祉協議会事務局長
 江口康彦 愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長
 三好宏和 A J U 自立の家わたちコンピューターハウス
 岡崎千賀子 愛知県教育委員会あいちの学び推進課主査
 杉山雄一 愛知県教育委員会義務教育課指導主事
 船尾日出志 愛知教育大学名誉教授
 ユニバーサルサービス事業部



令和七年度 福祉体験作文コンクール募集要項

一、趣旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表現したものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

二、主催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近なところでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとします。

五、部門

- (一) 小学校低学年の部（一～三年生）
- (二) 小学校高学年の部（四～六年生）
- (三) 中学校の部
- (四) 高等学校の部

六、作品規定

- (一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の文字制限は次のとおりとします。
 - ア 小学校低学年（一～三年生）——（四〇〇字以上二二〇〇字以内）
 - イ 小学校高学年（四～六年生）——（八〇〇字以上一六〇〇字以内）
 - ウ 中学校・高等学校——（一六〇〇字以上二〇〇〇字以内）
- ※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）

小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）

中学校 一校につき 二編以内

高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

(四) 応募作品の著作権は当会に帰属します。

八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に令和七年九月十二日（金）までに応募してください。

九、選考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、令和八年二月（予定）に発表します。

十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。



令和7年度
第43回 福祉体験作文コンクール

優秀作品集

発行 社会福祉法人
愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地
愛知県社会福祉会館内

TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503

